

「信頼される農場運営」のためのGAP認証



原材料が安全でなければ、真の食品安全は実現しない。近年、グローバルの食品関連企業や大手小売事業者を中心に、調達基準として農産物の生産工程管理基準であるGAP認証の取得を求める企業が増えている。マネジメントシステム部門 GAP認証室 室長 林 高弘と、次長 天坊 容子に、食品安全、環境や人権への配慮といったエシカル消費のニーズにも対応し、生産物の「生い立ち」の分かるGAPの取り組みをはじめ、食品安全において消費者が注意すべきこと、GAPとISOの比較、経営ツールとしての活用法などについて聞いた。



一般財団法人日本品質保証機構 マネジメントシステム部門 GAP認証室
室長 林 高弘(写真右)
次長 天坊 容子

GAP認証とはどのような基準か

GAP(Good Agricultural Practice: 農業生産工程管理)とは、「食品安全」「環境保全」「人権・福祉に配慮した労務管理」「作業者の労働安全」という要素の持続可能性を確保しつつ、「生い立ち」の分かる農産物の生産を行うための取り組みをいいます。こうした取り組みの実施により持続可能性だけでなく、農産物の品質向上、農場経営の改善や効率化、消費者や取引先からの信頼性向上などの効果も期待されます。

そのような生産者のGAPの取り組みを第三者が認証する制度が「GLOBALG.A.P.」「JGAP」「ASIAGAP」認証です。GLOBALG.A.P.は欧米を中心に世界120カ国以上で活用されているスキームで、特にGLOBALG.A.P.の総合農場保証(IFA)規格は、大手小売の調達基準として活用されています。JGAPは日本の法令や生産環境、社会環境を考慮し

た要求事項で構成された規格で、ASIAGAPはJGAPの要求事項を包含しつつ、国際的な要求事項も考慮し基準を定めた規格です。「世界食品安全イニシアチブ(GFSI)」(*1)による国際承認規格は、GLOBALG.A.P.とASIAGAPとなります。ASIAGAPがGFSIのベンチマーク要求事項を意識した構成の要求事項である一方で、生産者の取り組みやすさをより意識した構成の要求事項となっている点から、GLOBALG.A.P.とJGAPは親和性の高いものといえます。

(*1) GFSI(Global Food Safety Initiative)は、食品・消費財関連企業の国際的なネットワークTCGF(The Consumer Goods Forum)の下部組織で、食品安全に特化した委員会です。食品関連企業が順守すべき安全基準を承認し、食品安全を確保する活動を行っています。

3つのGAPの比較

	JGAP	ASIAGAP	GLOBALG.A.P.
認証プログラムオーナー(Certification Programme Owners)	日本GAP協会		FoodPLUS (ドイツ)
国内の全認証件数(2022年9月末)	1,676件 (農場数 4,934)	485件 (農場数 2,253)	約800件 (全世界:208,400件)
GFSI承認	なし(国内規格)	あり(国際規格)	あり(国際規格)
認証書有効期限	2年間	2年間	1年間
シンボルマーク			
製品パッケージへのマーク利用		×	×

安全と信頼、安心のために 生産物の「生い立ち」を見える化する

現代の日本では、消費者は安全な農産物を求めながら、安全性の科学的根拠はあまり評価しない傾向にあります。直売所やフリマサイトでは「生産者（であろう方）の顔が分かる＝安全」として販売されていますが、本来は顔が分かるからというより、信頼できるトレーサビリティの仕組みがあり、安全性がきちんと確認できて初めて安心につながるはずです。生産物の「生い立ち」を見える化し、生産者の日々の取り組みを評価するGAP認証は、そのような現状に対して寄与できる仕組みです。GAPの要求事項には、生産者が日々取り組まれている内容も多く、生産物の安全性と信頼性を確保する上で、本来、当たり前に取り組むべき内容が求められているともいえます。一方で、生産者それぞれが追求するこだわりの農法による生産、希少野菜の生産、取引市場価格を意識した生産品目や収穫時期の調整、環境に配慮した循環型農業や完全閉鎖型植物工場による生産といった、付加価値やブランディングにかかわる部分は、GAPの上に展開されるべきものといえます。そのまま食される場合はもちろん、加工食品として農産物が原材料使用される場合も、原材料であ

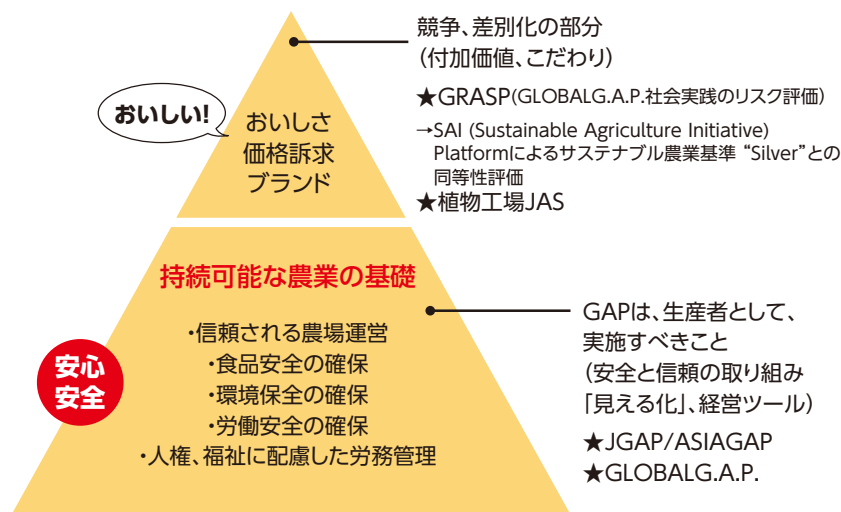
る農産物が安全でなければ真の食品安全は成り立たないため、農産物の「生い立ち」が分かることはとても重要です。昨今は大手コンビニもGAP認証の取得を調達基準とするなど、原材料である農産物の安全性と信頼性が求められる社会へシフトしつつあります。

消費者にとってのGAP認証農産物製品

消費者が農産物の安全性を考えると、まず農業に目が向きがちですが、農業には科学的根拠に基づいた安全基準があり、残留農薬が安全基準を超える量でなければ、口にしても大きな健康被害が生じることはまずありません。むしろ、最近アレルギーに関するリスクの方が深刻です。例えば、食品由来の有機質肥料を散布したり、甲殻類の殻などの食物残渣を土に混ぜたりと、アレルギーに関するリスクのある農法も決して少なくありません。GAP認証の要求事項には、アレルギーの交差汚染の防止に関する項目などもあります。例えば、ミルクティーなどの飲料に含まれる乳製品の生産物への交差汚染を防ぐため、作業場などでは、水を飲む以外の飲食が禁止されています。そのような観点からも、GAP認証品は安全性にも配慮した「生い立ち」の分かる農産物だといえます。

我々としてもぜひ消費者の皆さんに、認証基準にのってつくられた「生い立ち」の分かるGAP認証農産物を購入していただきたいと思っています。ですが、BtoBの制度であるASIAGAPやGLOBALG.A.P.では、消費者への直接的なアピールが禁止されているため、店頭ではそれがGAP認証農産物かどうか見分けることはとても難しいのです。ただ、

生産工程管理規格の関係図



GLOBALG.A.P.では認証を取得し、GRASP評価が100%適合で、申請を行った場合に付けられる「GGNラベル^(*)」があります。また、JGAPは認証農産物であることを示す「JGAP認証農場ロゴマーク」、および認証農産物を小分け・加工した商品または原材料として製造した商品であることを示す「JGAP農畜産物使用ロゴマーク」を製品に付けることができます。こうしたロゴマーク付きの製品は、まだ多くはありませんが、少なくともこうしたマークが付いていれば、「生い立ち」の分かるGAP認証農産物もしくは認証品を使用した製品であることが分かります。GAP認証農産物を使用しているスーパーやコンビニ、外食チェーンもあるので、そのようなお店を選ぶのもよいでしょう。

(*)「GGNラベル」は、GLOBALG.A.P.認証を取得した生産者の製品に付けることができる消費者向けラベルです。これは責任ある農業を消費者に見え化するためのラベルで、消費者はWEB上のGGNラベルポータルサイトで製品を追跡できます。

GRASP評価

労働者の健康、差別、賃金の正当性などの社会的課題に対応する評価基準として、「GLOBALG.A.P.社会実践のリスク評価(GLOBALG.A.P. Risk Assessment on Social Practice:GRASP)」という評価基準も設けられており、GLOBALG.A.P.認証と併せた適合性評価が可能。

認証プロセスはISOと類似し 有効期限や要求事項は異なる

認証を付与するまでのプロセスは、審査員が農場を訪問し、各規格の基準に照らして適合か不適合かを評価。審査報告書に基づいてレビュアーが判定し、認証決定後、認証書が発行されるというもので、基本的にマネジメントシステム審査と同様です。要求事項については、具体的な管理策が明記されており、生産者が理解しやすく、取り組みやすい内容となっています。

また、ISOは認証の有効期限が3年間で、2回の定期審査と更新審査で構成されています。GLOBALG.A.P.の有効期限は1年間ですが、ISO同様に3年サイクルでの構成となっています。

また、JGAPとASIAGAPでは、有効期限は2年ですが、毎年フルパッケージでの審査となります。いずれの規格も、最低審査時間が定められています。

しかしながら、JQAのGAP審査では、特に初回の審査においては、審査時間を少し長めに取らせていただき、チェックリストの適合性確認のみに終始せず、要求事項の意図をしっかりとご理解いただけるよう、丁寧に審査を進めています。また、JQAのGAP審査員は全員ISO 9001審査員としての研修を完了しているため、経営改善に役立つ審査をモットーに、表面的な審査ではなく、GAPを経営ツールとしてご活用いただけるよう尽力しています。

PDCAサイクルにより 農場の経営改善が可能に

規格改定に伴い、2024年1月1日から義務化となるGLOBALG.A.P.のバージョン6.0(以下、Ver.6)では、第1～3項が文書管理、記録、継続的改善の要求事項となり、ISO 9001に近づいてきました。GLOBALG.A.P.では、例としてどのロットの種でつくり、いつ肥料を使い、いつ植えて、灌水し、何の農薬を使い、収穫して、どこに出荷したのかまで全て記録に残すことを義務付けています。こういった記録は自分の身を守るためにも必要です。例えば、加工や卸業者のところで原材料の汚染が見つかったとき、トレーサビリティが取れなければ誰がどの農場でつくったものか分からず、全品回収になりかねません。しかし、どの農場のものかが分かれば回収割合が1/3程度に減り、さらに、農場内のどの圃場かが分かれば1/8～1/10まで圧縮できます。記録は生産者や加工業者の経済的ダメージを減らし、さらにはフードロスの削減にも寄与し得るのです。

また、価格維持ができない場合など、せっかくつくった農産物が収穫されずにそのまま廃棄されることもあります。最も価格が上がる時期を予測し、そこで出荷できるように生産・出荷調整できるとよ

いのですが、それには設計・計画の概念が必要です。GAPの導入により生産者が自らPDCAを回すことができるようになれば、より効率的な設計・計画が可能となります。生産量と出荷量、農薬使用量・施肥量と収穫量、再生・非再生エネルギー使用量などを計数的に整理し、需給バランスや農薬・肥料の費用対効果、エネルギー効率などが把握できるようになれば、国産品の供給の少ない時期に出荷可能になるよう生産・出荷調整を行う、費用対効果を鑑みて農薬・肥料やエネルギーの使用量や頻度を調整する、見た目が悪ければ加工に回すなど、さまざまな形で農場運営の効率化につなげていけるでしょう。我々はGAPをこのような経営改善ツールとして活用していただきたいと考えています。

日本の生産者事情とGAPの取り組み

オリンピック・パラリンピックや万博などの国際イベントでも、GAP認証は調達の基準となっています。これらをきっかけに地域全体で認証取得を進めているところもありますが、まだ取得が難しい生産者もいるでしょう。農林水産省では「GAPをする（GAPに取り組むこと）」と「GAPをとる（GAP認証を取得すること）」と表現を使い分けており、国際基準に準拠した生産に取り組むだけでも、認証取得までも良いとしています。重要なのは「GAPをする」ことなのです。

日本の生産者の多くは規格が要求する作業を行っており、一部の記録や教育研修、情報共有の証拠を残すところに不足がある程度なので、GAP認証取得のハードルはそれほど高くはありません。

また、GRASP評価についても、家族経営農家では時間外労働の基準を守るのが難しいなど、さまざまな事情があるかと思いますが、GLOBAL G.A.P.では農業の経営型ごとに取り組み方を示していたり、国別解釈ガイドラインにより各国の法令や実状を反映し、適合性に関する基準を承認する仕組みがあったりします。GRASP評価は、認証ではなく、

100%中80%適合というように適合割合が示され、組織の現状を把握することに役立ちます。

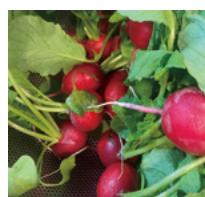
なお、昨今ではグローバル企業との取引においてエシカル^(※3)であることが重視され、持続可能性や労働福祉・人権などで問題のない農業を目指す「SAI (Sustainable Agriculture Initiative：持続可能な農業イニシアチブ) プラットフォーム」による「FSA (Farm Sustainability Assessment：農場サステナビリティ評価)」取得が要求されるようになりつつあります。

(※3) エシカル (Ethical) は、英語で「倫理的な」という意味。一般的には、「法的な縛りではないが、人間が本来持つ良心から発生した社会的な規範」のことをいいます。

GAP認証サービスを通じ

真に農業に寄与できるJQAを目指して

GAP認証サービス開始当初、農業分野においてJQAの知名度はゼロに等しい状況でした。お客さまのニーズをくみ、フットワーク軽くきめ細かいサービスを提供しながら、少しずつ浸透させていきました。今後ますますGAP認証の取得ニーズが増えていくことが見込まれる上で、依頼に確実に応えられる組織体制を構築し、「GAPのことはJQAに頼めばなんとかしてくれる」と思われる立場になっていければと考えています。またGLOBAL G.A.P.について理解を深めていただくため、Ver.6に関するeラーニングプログラムも開発しリリースしました。JQAはISO審査で蓄積したノウハウを活用し、GAP認証サービスを通して日本の農業に寄与できる組織になることを目指しています。そして消費者の皆さんには、ぜひ、「生い立ち」の分かるGAP認証農産物を食べていただきたいですね。



GAP認証室のメンバーが畑で育てた野菜

今後もGAP認証サービスを通じて社会に貢献し、総合的により良い農業生産に寄与できればと考えています。

(取材日：2023年11月29日)